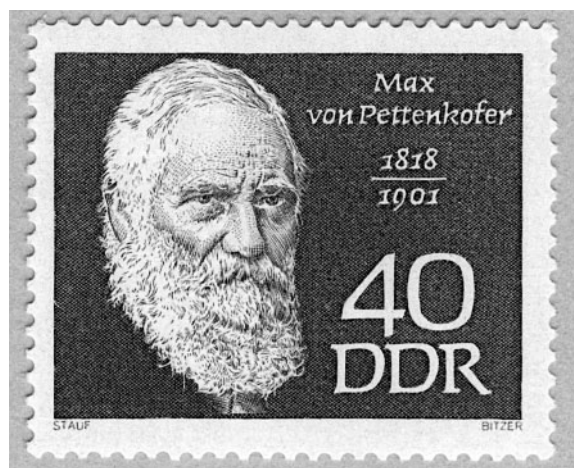


# ドイツの切手に現れた科学者、技術者達 (19) マックス・フォン・ペッテンコーフェル

*Scientists and Engineers in German Stamps (19). Max von Pettenkofer*

筑波大学名誉教授 原田 馨  
KAORU HARADA

*Professor Emeritus, University of Tsukuba.*



生誕150年記念切手、1968年DDR発行

## マックス・フォン・ペッテンコーフェル

マックス・フォン・ペッテンコーフェル (Max von Pettenkofer, 1818-1901) ドイツ (バイエルン王国) の衛生学者。

ペッテンコーフェルは、バイエルンのリヒテンハイム (Lichtenheim) に生まれた。両親は勤勉であったが、大勢の子供達を養育することが困難であった。父の兄はミュンヘンで王室の薬剤官をしており、また子供がなかったのでペッテンコーフェルの兄弟は次々とミュンヘンに引き取られて養育された。ペッテンコーフェルは9才の時に伯父に引き取られたが、子供心にただひたすらリヒテンハイムの田舎が恋しかった。しかし学校の成績はよく、古典語を楽しむことができるほどになった。伯父はペッテンコーフェルに薬学を勉強させ薬剤官にしたいと考えていた。ペッテンコーフェルは薬学、化学の勉強をはじめたが、一寸した伯父との言い争いで伯父の家を飛び出し劇団の一員となった。別の伯父の執り成しで一年後に世話になっている伯父の家に戻ることができたが、王室薬剤官になることは殆ど絶望的であった。当時ドイツにおいて芝居の役者の社会的地位が低かったことを示している。しかし町の医者にはなれるであろうと考え、先ず医学を学んだが化学にも興味を持っていた。ペッテンコーフェルは薬剤師試験と医師の試験の両方に合格したが、化学を学ぶ希望が強く医師になるつもりはなかった。ヴェルツブルクのシェーラー教授のもとで化学を学び、その後ギーセンのリービヒのもとで学んだ。有能なペッテンコーフェルをリービヒは可愛がった。ペッテンコーフェルは人格的にも優れた人であり、このギーセン滞在は両者にとって有意義なものであり、お互いに相手を高く評価し合った。残念ながら学費が切れ

たので、ペッテンコーフェルはミュンヘンに帰ったが、ギーセンでは多くの友人を持つことができた。リービッヒらの計らいでペッテンコーフェルは造幣局に職を得、そこで多くの問題を次々と解決した。1847年ミュンヘン大学に医化学教室が設置され員外教授になったが、1850年に伯父が死亡し、その後任として王室薬剤官となることができた。彼の多才な能力の故にバイエルン王国の教育問題にも進言し、大化学者リービッヒをミュンヘンに招聘することへと発展した。この運動にペッテンコーフェルが主だっていたり、リービッヒは1852年にミュンヘンに移ってきた。ペッテンコーフェルは薬学、医学及び化学の知識を総合して衛生学を創始した。衛生学は境界領域に生まれた新しい学問であった。人々が健康に生活するにはどのような知識が必要であるかと云うことについての学問である。彼はこの新分野について研究し、ミュンヘンを伝染病のない健康な都市に変えることに成功した。この成功によりドイツ各地の大学には衛生学の教室が開設された。ペッテンコーフェルは人生の苦勞人でありながら才気のほとばしる人物であり、他人との付き合いもよい人であった。彼の人柄を示す一つのエピソードに次のような話がある。R. コッホがコレラの病原体を発見した時彼はこれを信ぜずコッホが培養した病原菌を飲んだと云うことである。幸い死には到らなかった。

ミュンヘン駅近くのペッテンコーフェル通りに面してペッテンコーフェル研究所がある。玄関正面に彼のレリーフが掲

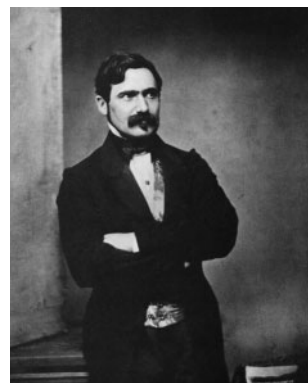
げられてあり、研究課題と所長名が記されていたが、その中に細菌学もあった。私がペッテンコーフェルは病原菌を信じなかったのではないですかと冗談を云うと案内の研究者はこの冗談に微笑みで答えてくれた。

マクシミリアン広場にJ.リービッヒとペッテンコーフェ

ルが互いに向かい合って座っている像があるが、残念ながら風化が激しい。大化学者リービッヒをミュンヘンに招聘したペッテンコーフェルに感謝のための像でもある。老年になり大学と学士院長の職を辞したが、咽にできた腫瘍を癌だと思い込みピストル自殺を遂げた。ピストルで死ななければ大変長生きをしたであろうと云われている。彼の墓はミュンヘン旧南墓地にある。

余談ながらペッテンコーフェルは研究所の初代所長であり、2代目所長ハンス・ブッフナー (hans Buchner, 1850-1902) の弟は発酵の問題を解決し、ノーベル賞を受賞したエデュワルト・ブッフナー (Eduard Buchner, 1860-1917) であった。彼は第一次世界大戦に陸軍少佐として参戦し、ルーマニア戦線で戦死した。ノーベル賞受賞者の戦死とは珍しいことである。

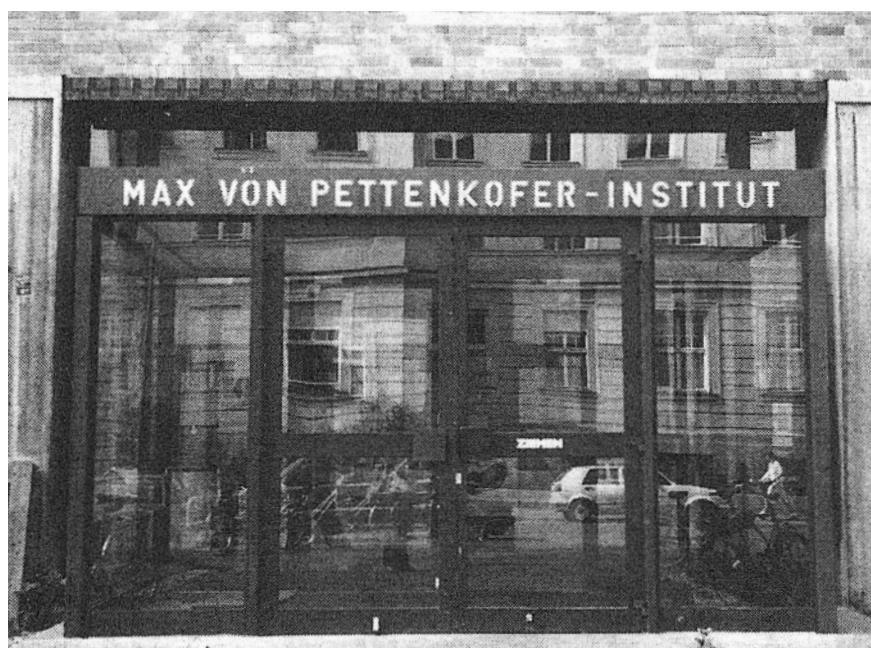
※本稿に掲載の写真は、著者の撮影によるものである。



マックス・ヨセフ・フォン・ペッテンコーフェル (フリー百科事典「ウィキペディア」より)



ギリシャ神話の衛生、健康の女神ヒュギエイア (Hygieia)。ハイデルベルグ薬事博物館で撮影。



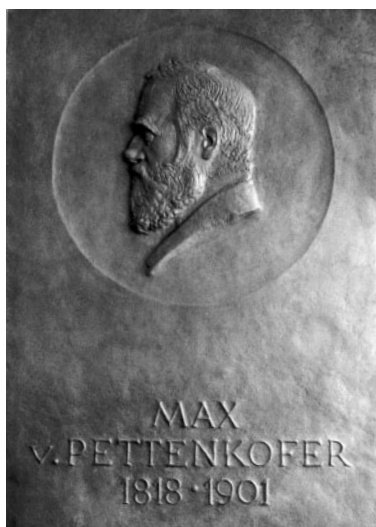
ペッテンコーフェル研究所入口



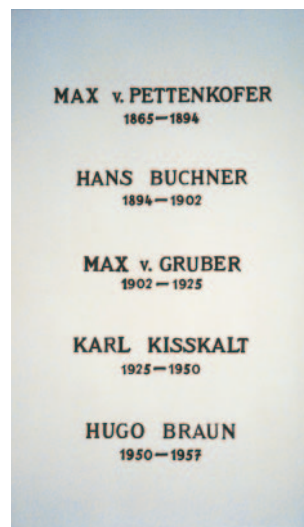
# ドイツの切手に現れた科学者、技術者達(19) マックス・フォン・ペッテンコーフェル



マクシミリアン広場のリービヒ像と向かい合って座っているペッテンコーフェルの像



ペッテンコーフェル研究所の正面玄関のレリーフ



ペッテンコーフェル研究所に掲げられている歴代所長の標識



ミュンヘン旧南墓地にある墓



リヒテンハイムに残るペッテンコーフェルの生家

## 表紙写真

**ヒメシャクナゲ(姫石楠花)**  
**躑躅(つづじ)科 ヒメシャクナゲ属**  
 南会津の田代山湿原で6月末の撮影です。背丈が10cm前後の常緑小低木で、紅紫色の壺型の5~6mm程の花を下向きに付けます。地表を覆う絨毯状の群生は見事なもので、白い花のシロバナヒメシャクナゲもあります。学名は、ギリシャ神話のアンドロメダにちなんだ *Andromeda polifolia* と表されます。ヒメシャクナゲの名の由来は、花の形は全く違いますが、小さな葉の形がシャクナゲに似ることによるものです。(写真文 北原)

## 編集後記

今年の夏は、地球温暖化の加速を予見させるような記録的な猛暑でしたが、読者の皆様にはいかがお過ごしになりましたでしょうか。ご執筆の皆様には、厳しい暑さの中ご尽力賜りまして厚く御礼申し上げます。

弊社では、試薬を通じて多くの分野の方々のご交誼賜り、また数々のご教示を頂きまして社内に根ざした有意義な経験も少なからず蓄積されて参りました。有益な仕事をされている研究者の技術を広く紹介するという本誌の主旨に加え、弊社に根ざした試験技術や製品開発に投入された技術の一端を添えさせて頂き、ささやかながら本誌の裾野を広げていきたいと願っています。ま

た今後の新たな企画として、多くの読者に気軽に参画いただき、楽しく読んで参考になるというユニークなコラムの導入を考えております。ここに改めて編集室より読者の皆様にお願いがございます。「楽しいラボの知恵袋..」(仮称)ともいうべき軽いタッチの寄稿文の別枠コラムとして、各分野の皆様のラボ活動からこれは優れもの、便利、簡単、正確、安全、環境に優しいなどの改良ネタや面白いネタを広く紹介させて頂きたく、皆様からのご投稿を何卒よろしくお願ひ申し上げます。その他ご投稿についてのご質問、ご意見等ございましたら下記編集室までご遠慮なくお寄せ下さい。(古藤 記)



**関東化学株式会社**

〒103-0023 東京都中央区日本橋本町3丁目2番8号  
 電話 (03) 3279-1751 FAX (03) 3279-5560  
 インターネットホームページ <http://www.kanto.co.jp>  
 編集責任者 古藤 薫 平成19年10月1日 発行